

看護師の感情労働と バーンアウトとの関連について

○齋藤嘉隆・尾形明子
(広島大学大学院教育学研究科)

問題と目的

近年、新卒看護師の早期離職が問題であり、バーンアウトはその離職の一因とされ、予防の重要性が示唆されている(塚本, 2007)。

バーンアウトは“心的エネルギーが絶えず過度の要求された結果、情緒的消耗感、脱人格化、および個人的達成感の減退を伴う症候群”と定義され、卑下、仕事嫌悪、思いやりの喪失などを伴うとされる(Maslach & Jackson, 1981)。

Zapf(2002)は、バーンアウトの原因を感情労働という概念を用いて検討している。感情労働とは、他者の感情状態を変化・維持することを目的とし、適切であるとみなす感情を声や表情あるいは身体動作によって表現し、そのために自分自身の感情を調整する労働である(Hochschild, 1983)。さらに感情労働は“表層演技”と“深層演技”の2つの方略に分類される。表層演技とは、経験される感情そのものに変化はないが、表出される行動を状況に適したものに变化させる表面的な方略であり、深層演技は、経験される感情そのものを状況に適したものに变化させることによって、自然にそれに伴う表出が生まれるようにする方略である。感情労働とバーンアウトの関係について検討した研究において、深層演技がバーンアウトにネガティブな影響をもたらす(大村, 2009)という結果と、深層演技がバーンアウトにポジティブな影響をもたらす(Brotheridge & Lee, 2003)という結果があり、一貫していない。その原因として、従来の感情労働の尺度では、表層演技と深層演技が十分測定できていない可能性がある。Blau et al. (2010)は、“difficult client”に対応するときの表層演技と深層演技の側面から細分化を試みている。現在、日本の研究において、Blau et al.(2010)のように表層演技・深層演技の下位因子を想定した尺度を検討した研究がない。そこで本研究では、Blau et al.(2010)の感情労働尺度を翻訳し、その信頼性と妥当性を確認することを

目的とし、その上で感情労働とバーンアウトとの関係を検討する。

方法

調査対象 調査対象は看護師 107 名(男性 7 名, 女性 100 名, 平均年齢 26.82 歳)であった。

実施方法 縁故法により参加者を募り、ウェブ上で質問紙への回答を求めた。

質問紙の構成 日本語版感情労働尺度、看護師の感情労働測定尺度: ELIN(片山ら, 2005), 日本語版バーンアウト尺度(久保, 2004)を用いた。

結果と考察

散布図を確認し、天井効果がみられた 2 項目を除外した。探索的因子分析を行った結果、原版と異なり 4 因子構造で、表層演技に関しては原版と同一の因子構造であったが、その他の 3 因子の構造は異なっていた。そこで項目内容を再検討した結果、「感情コントロール」、「共感的深層演技」、「ポジティブ再評価的深層演技」の 3 因子が新たに確認された。モデル適合度は CFI=.980, RMSEA=.065 で十分な値を示した。各因子のクロンバックの α 係数は、表層演技・感情コントロール・共感的深層演技の 3 因子は $\alpha=.60$ 以上で信頼性が確認された。しかし、ポジティブ再評価的深層演技は $\alpha=.450$ で十分な値ではなく、信頼性があるとは言えなかった。次に、構成概念妥当を確認するため、本研究で作成した尺度の「表層演技」と ELIN の「表層適応」、「感情コントロール」と「表出抑制」、および「共感的深層演技」と「探索的理解」に有意な相関がみられ、概念的に共通性があると考えられる因子間に関連性が確認された。また、「ポジティブ再評価的深層演技」と「深層適応」に有意傾向が見られており、因子全体にある程度の妥当性があると考えられる。さらに、「表層演技」がバーンアウト尺度の下位因子「情緒的消耗感」「脱人格化」に正の相関を示したが、その他の下位因子と相関は見られず、共感的深層演技と脱人格化に負の相関がみられた。